

序

グローバリゼーションとつながりの人類学

越智 郁乃

はじめに

本書は、広島大学大学院において文化人類学を主たる専攻とする教員と修士（単位取得退学者を含む）14人による、グローバリゼーションを経た社会・コミュニティの変化とそこで生じる「つながり」に関する研究と議論の成果論文集である。執筆者たちは、文化人類学を学び、教え、それぞれがフィールドとする東アジア、東南アジア、オセアニア、アメリカ、ヨーロッパに至る広範な地域において長期間にわたる調査を続けてきた。それらのどのフィールドにおいても、グローバリゼーションによって様々な影響が生じている。

1. グローバリゼーションと人類学

東西冷戦終結後の1990年代以降、グローバリゼーションは新たな局面を迎えたと言える。資本や労働力の国境を越えた移動の活発化とともに、貿易を通じた商品・サービスの取引や、海外への投資が増大した。そのような新たなグローバリゼーションのもとで国境を越えた経済的結びつきの深化は、経済発展と自由主義経済の「よさ」を広く浸透させていくプロセスになることが期待されていた。その一方で、グローバリゼーションの便益を享受するためには、絶えず企業の技術革新を行い、技術革新に対応して経済社会制度を迅速に適応させるとともに、障害は取り除くこと、それらにふさわしい人材を育成する必要性が

叫ばれもした [内閣府 2004]。大学における教育・研究もその影響を大きく受け、変革を迫られてきた。

文化人類学は、長らく「遠くの異文化」を研究してきた。そして小地域社会での緻密なフィールドワークと、そこで得られた知見の比較対照によって文化の普遍性と独自性を明らかにしようとしてきた。では、この学問が、グローバリゼーションの結果、時間・空間が「圧縮」され [ハーヴェイ 1999]、均質化しつつあるように見える世界において研究し続けることに、いかなる意義があるのだろうか。アメリカの人類学者ジェームズ・クリフォードが『ルーツ 20世紀後期の旅と翻訳』[2002 (1997)] において「旅する文化」と呼んだように、文化は遠い過去から人々の交易、巡礼、旅など様々な移動によって異種混交しながら形作られてきた。そして、移動の中で分節化される人間の差異、絡まり合った文化の経験、そしてますます密接に関連しているものの均質ではない世界の構造と可能性に着目することの重要性を強調する [クリフォード 2002:11]。本書でも、国境を越えた結びつきに対し、ローカルで微細な日々の生活実践や積み重ねてきた過去と照らし合わせて初めて一体的で複合的な議論となりうると考える。

2. つながりと人類学

同時に本書では、グローバリゼーションによって生じた「つながり」に注目する。『つながりの文化人類学』において高谷紀夫と沼崎一郎は、『「つながり」とは人々を結びつける『まとまり』や『ひろがり』を作り出す一方で、『へだたり』をも作り出す』と指摘する [高谷・沼崎 2012]。19世紀後半から20世紀半ばにかけて、欧米の人類学は親族関係という「つながり」に注目し、そこでの親族関係の網の目という「まとまり」や出自という「つながり」、その一方で分節や婚姻関係で派生した「まとまり」と、分節間で生じる「へだたり」について論じてきた。1980年代以降、人類学理論の潮流の変化と、いわゆる未開社会の急速な変化が相まって、親族研究が人類学に占める地位は相対的に低下したが、2000年代以降になって、「親族研究の再活性化」が起こっている。そこに見られるのは、人々が生きて体験している「つながり」を日常の文脈において記述し、内的に、あるいは当事者の立場から分析していこうとする姿勢である [高谷・沼崎 2012:10-13]。

グローバリゼーションによって地球規模に拡大する経済的な結びつきは、従来生じていた「へだたり」を解消するものとして期待されることもある。しかし国境を越える資本と人の移動やコミュニケーションが飛躍的に増大していくなかで、ナショナリズムや排外主義の活性化、経済格差や貧困の拡大なども指摘され続けてきた。本書は、このような「つながり」と「へだたり」、接続と断絶、連帯と疎外といった今日のグローバリゼーションがもたらす両義的な動態を、抽象的な理論としてではなく、世界各地の具体的な生の文脈からとらえることを目的とする。そうすることで、文化人類学的方法と視点の現代的意義を示し、グローバリゼーションをキーワードとする他分野との対話の基盤を築くことを目指す。

そこで本論集では「ネーションと記憶」「新しいつながりの形成」「ケア・支援の現場から」「ツーリズムとつながり」という4つのセクションを設けた。

3. 各部と各章の位置づけ

第I部「ネーションと記憶」では、グローバリゼーションと一見正反対に思われるナショナリズムについて論じる。グローバリゼーションによってナショナリズムは弱まると思われていたが、日本における「嫌韓・嫌中」など周辺国を意識したある種のナショナリズムの興隆は、現代のグローバリゼーションの一側面を表していると言える。ここでは近年のグローバリゼーションのなかでのネーションの動態を、「記憶」や「感情」、また明確な言葉にならない「居心地」というキーワードによって論じる。

最初の論文は上水流久彦の「グローバリゼーションズから見る台湾——中国との対峙における『居心地』」である。台湾漢民族のネットワーク研究を出発点に、東アジア、南洋諸島とフィールドを広げてきた上水流は、「欧米」という中心を持ち「周縁」の不均衡と不平等から成り立つ「大文字のグローバリゼーション」に対して、8～9世紀には存在していたユーラシア・アフリカに広がる交易ネットワークという「プライマリー・グローバリゼーション」について指摘する。その中で生まれた華僑・華人ネットワークや大陸からの漢人の移住によって次第に形作られた「台湾」は、民主化と人権の重視により中国と差異化したが、他

方で台湾華人の中で中華の優位性について誇りを持つこともある。台湾において常に存在する「独立か、中国との統一か」という問題に関する複雑な状況を概念化する言葉として、上水流は「居心地の良さ／悪さ」を挙げる。人権や環境保護を重視する台湾に居心地の良さを感じている人もいれば、欧米からもたらされた価値観で中国を批判する台湾に居心地の悪さを感じる人もいる。このように複数の価値観が時に一人の人間の中に矛盾するものとして存在するが、この状況こそが複数のグローバリゼーション（グローバリゼーションズ）によってもたらされたのであると上水流は指摘する。台湾は Covid-19 の早期収束後、国際的地位とともに「居心地の良さ」を上昇させたように思われるが、新たに苛烈さを増す香港の状況をめぐってまた様々な場所で「居心地」が議論されているのではないだろうか。

続く玉城毅論文「感情と学問——沖縄研究におけるナショナリズムとコスモポリタニズム」では、琉球処分から続く日本への同化の中で生まれた沖縄研究史を「感情」をキーワードに論じる。国民的統一と沖縄のオリジナリティを求めた「沖縄学の父」伊波普猷の明治期の研究から一転して、戦後の社会人類学的研究では「政治的沈黙」が貫かれた。文学や政治思想史では本土復帰というまさに政治的状況が盛んに議論されたが、いずれの研究においてもテーマになったのがムラヤシマと呼ばれた集落であった。文脈は異なるものの、琉球弧の島々、そしてシマごとの多様な独自の文化を明らかにすることが単一の国家を相対化することにつながるのである。1995年の米軍人による少女暴行事件以降、研究者は国家との関わりの中で研究する視点を強く打ち出した。玉城は自立論と独立論の対立の中から、「現実／理念」と「ナショナリズム／コスモポリタニズム」という二つの対立軸を読み取る。独立にはナショナリズムが利用されるが、それは琉球王国以前から島ごとに形成されていた独自の文化や、現在島に暮らす多様な人々との多文化共生を否定することにつながる。この一連の研究史の中にある「感情」は、「期待」しても常に「失望」させられるという日本との関係の中で紡ぎ出されたもので、それは沖縄の人々の「身構え」でもあるのだ。

第 I 部最後のハリス田川泉の論文「原爆投下をめぐる歴史解釈——すれ違う記憶とアイデンティティ」は、記憶をキーワードに日本とアメリカのミュージ

アムにおける原爆展示の歴史的解釈について論じる。アメリカのミュージアムにおける公的記憶をめぐる政治性について研究する田川は、日本でも報道され議論を呼んだスミソニアン博物館の「原爆展」中止（1994年）に着目する。田川はミュージアムの外で日本人高校生が体験した戦勝国アメリカの歴史認識＝個人の記憶から出発し、スミソニアンと広島平和記念資料館という両ミュージアムにおける公的な歴史認識の違いと、モノの語り口＝展示のリニューアル、ヒトの語り口＝展示される個人の記憶を通じて形成される文化的記憶について考察する。「同情」「共感」といった「感情」がミュージアムにおいて展示と観覧者を結びつけることもあれば、国家エリートの歴史と民衆の歴史をつなぐ試みにもなる。ただし日米両者の認識はすれ違い続けている。それを「調停」する試みとしての在米被爆者講和会の存在を田川は挙げる。ミュージアムは多様な人々が集うアリーナであるが、同時にミュージアムを訪問しない人々にどのように働きかけるか〔田川 2005〕ということも「調停」の鍵になるだろう。

第 II 部「新しいつながり」では、グローバリゼーションの中でもたらされた新たな統治性や人やモノの移動によって、フィールドにおいてどのような「つながり」の形成が見られるのか、それが人々の生にいかなる影響を与えるのかを、「コミュニティ」「シティズンシップ」「ジェンダー」「伝統文化」「差異と相同性」というキーワードから描き出す。

フィリピン島嶼部の海域世界に生きる人々の日常の実践に関する研究から出発した関恒樹は、フィールドを都市部に発展させた後も一貫してグローバリズムと新自由主義的潮流に直面する人々の生活戦略とそこに生まれるエージェンシーに注目する。「ポスト権威主義体制期フィリピンにおける新たな社会性と都市統治——スラム再定住政策を事例に」では、ジェントリフィケーションが進むマニラ都市圏のスラムに着目した。常に立ち退きによってコミュニティや家を失くす不確実性を軽減するのが、マルコス政権崩壊後に登場した法律や制度、それを取り巻くアイデアや人的アクターである。それらは「社会性の束」として度重なる水害などの災害に対する「リスク・ヘッジ」となった。他方でこれらはスラムの雑然さや災害の中で住民が共在してきたというコミュニティ概念、

そこから生まれた自己認識を取り払い、自己統治可能な市民的主体へと変換する装置として機能している。フィリピンで Covid-19 に対して進められた「コミュニティ防疫」を通じて、「自発的に国家に協力する主体」の構築を目的とした規律的統治が強まった背景にも、関の論じる都市統治の作用が考えられる。

関が指摘したようにグローバリゼーションによってより国家統治が進展する現在、国家は帰属先として重視される。栗田梨津子論文「多文化国家オーストラリアにおける新たな市民意識の可能性——先住民とアフリカ人難民の『黒人性』に着目して」は、移民国家におけるメンバーシップとシティズンシップとの結びつきについて、社会で最も周縁化された先住民アボリジニとアフリカ人難民による日常生活におけるシティズンシップの経験とそれが人々の帰属意識に与える影響について論じる。帰属意識も法的立ち位置も異なる彼らは同じ「黒人」ではないが、白人性の対極にある先住民の黒人性に対する否定的な意味合いはアフリカ人にも付与され、両集団は差別や貧困による社会的排除に晒される。とりわけメディアによって流布された「脆弱性」「暴力性」イメージから、社会秩序を脅かす存在として捉えられるようになった。彼らは日常レベルでは、公共空間での人種差別発言や入店拒否され、時には不当逮捕されることもある。ある程度「白人性」を持つ＝英語を喋り仕事を持ちキリスト教徒である場合でも、容易にそれを剥奪されうる状況にある。そこで「黒人」から距離を取る人もいるが、両集団の中には主流社会から付与された「黒人性」の意味を読み替えることで、「黒人性」が孕む否定的な意味から自己を解放したり、共通性を認めたりする人もいる。日常レベルでの緩やかな連帯は白人に対抗するような強いものではないが、最終的に白人性を前提とした垂直的なシティズンシップでは十分に得られなかった帰属意識を補完する。つまり「黒人性」は両集団を「へだてる」のではなく、「つなげる」のである。

続く二論文では、グローバリゼーションの中での「伝統文化」をテーマに論じる。

新本万里子の論文「パプアニューギニアにおける月経の禁忌の実践とジェンダー・カテゴリー間の関係の変化——保健教育を受けた世代のサゴヤシ澱粉抽出作業をめぐって」は、国際機関・NGO による、家族計画プログラムや保健衛

生に関する教育、および月経衛生対処に関する開発的介入を受けて変化するローカルな月経にまつわる慣習に着目する。パプアニューギニアにおける月経中の女性との接触は、男性の生業や男性自身に影響する「危険」なものとしてタブー視されてきた。オーストラリアの植民地時代にキリスト教の布教を背景に作られた診療所や病院、20世紀中盤からの移動診察を経て、次第にローカルな人々にも近代的な医療がもたらされた。この地域の住民は、1980年代には資金力のある国際 NGO の家族計画プロジェクトを経験し、おそくとも 1990年代後半には、就学期の生徒たちが学校で保健教育を受けるようになった。2000年代に入ると、オーストラリア政府・国際 NGO・自国政府が関わりながら、月経衛生対処に関わるプロジェクトが推進される。ここでも複数のグローバリゼーションが見て取れる。月経を強く忌避していた世代が亡くなると、サゴヤシの澱粉抽出作業と月経に関する禁忌に変化が見え始める。このような女性たちの出現は、複数のグローバリゼーションによって既存のジェンダー・カテゴリーが揺らぎつつあることの証左であることが、綿密なフィールドワークから明らかになる。

次の荒木晴香論文「つながりが支える饗宴の実践——ツバル・ニウタオ島の事例より」では、ポリネシアの極小国家ツバルにおける移民による送金によって支えられている社会構造の中での饗宴実践を通じた島内秩序の可視化と資源分配について論じる。年中行事、歓送迎会、人生儀礼の大きな儀礼は回数こそ少ないが、最長で1ヶ月通して饗宴が行われることもある。そして小中規模な饗宴は、集落のどこかでいつも行われ、共に食べ、歌い、踊り、「遊び」の応酬を繰り返す。島外国外に分散して暮らす親族の絶えざる送金によって成り立つにもかかわらず頻繁に行われる饗宴は、現地社会でも「無駄遣い」と評されることがある。しかし一つ一つの饗宴への参与観察から明らかになるのは、ある饗宴では日常では不可視の規律的価値観が表出し、また別の饗宴では日常の規範が取り払われることで非日常が現出する、ということである。共食し、ダンスやスピーチを繰り返す「遊び」の感覚で饗宴の場を共有することで、人々は水平方向につながる。そして資源の再分配によって島内の平等性が強調されるのである。

このセクション最後は松井生子論文「カンボジア在住ベトナム人の結婚と民

族間関係——クメール人との通婚を中心に」である。カンボジアのベトナム人は同国において外部者とみなされ、差別や暴力の対象となってきた。松井は、調査村のベトナム人の結婚の特徴と、結婚を通したクメール人とのつながりの構築を明らかにしようとする。調査村のベトナム人の村人たちは多数派民族であるクメール人の村人と経済的に補完的な関係にあるが、二者間における通婚は少ない。その背景には、結婚を決定するプロセスの違いや、ベトナム人の夫方居住とクメール人の妻方居住といった慣行の違いがある。数少ない通婚事例においては、ベトナム人女性とクメール人男性の縁組が多く、妻の実家に近い場所に住むことが多かった。これに対しベトナム人男性とクメール人女性の縁組の場合、「クメール人の妻」は夫方に居住し家計を支える役割を果たすことができない、言語や慣習の違いによって家庭内のコミュニケーションもままならない存在とみなされてきた。しかし2000年代後半から親や年長者が決めた結婚ではなく恋愛結婚が主流になり、出稼ぎや就学などの移動によって通婚圏が拡大することで、民族間の結婚にも変化の兆しが見え始めた。松井は、頻度は少ないながらもこの10年間に成立したベトナム人男性とクメール人女性の縁組において、いずれも妻方居住であることに注目した。これらの例では、結婚において柔軟に慣習的な実践の調整が図られているほか、日常的に妻方夫方双方の往来がある。ベトナム人とクメール人の間では、その「差異」が強調されやすいが、実際の日常生活においては似通ったところ＝相同性が多く、「民族の違い」が大きな問題とはなっていなかった。他者化されたベトナム人のイメージは、移動と交流の中で日々変化を促されているのである。

第Ⅲ部「ケア・支援の現場から」では、グローバル化された家事労働の現場、そして新たな包摂の形が模索される地域や大学の障害者支援の現場において、いかなる「つながり」が形成され、どのような主体化が展開しているのかを、「男性性」「ノーマライゼーション」「包摂と排除」というキーワードから読み解く。

最初の論文は、長坂格「『再生産労働の国際分業』のなかの男性移住者——イタリアのフィリピン人男性家事労働者の男性性と自己の再構築」である。フィリピン共和国は1970年代から海外移住を政策的に推し進め、現在は世界有数の

「労働輸出国」となった。労働移住先はアジアだけでなく、中東・欧州へと拡大している。移住者と移住先での生活ネットワークの形成を故郷との関係に絡めて研究してきた長坂は、イタリアで家事労働者として就労する男性移住者のジェンダーに注目する。南アジアや東南アジアからの移住者男性に関する先行研究では、移住先での家事労働は「女の仕事」として忌避される傾向にある。しかしフィリピン人男性家事労働者の間では、家事労働職が女性性と必ずしも強く結びつけられているわけではなく、家事労働職に従事すること自体による彼らの男性性への脅威が語られることも少ないという。そうした彼らの移住先での家事労働経験理解の重要な背景として挙げられるのは、彼らの出身地社会の流動的な側面を持つ男性性概念、そして移住先と出身地との二重生活が持続していくという彼らのトランスナショナルな移住経験である。とりわけ後者に関わる帰郷中の諸行為の精密な描写からは、イタリア帰りの男性移住者たちが豪華な家を新築したり、多くの客を集める宴を主催したりすることに加え、男性サークル内での気前の良い酒の振舞いや、ギャンブルの場での大胆な賭けなど、男性サークル内で美学の遂行をも重視していることが示される。長坂は、そうした男性たちの「振舞いと冒険の美学」の遂行が、出身地社会における既存の男性性概念を温存させ、彼らの移住先での就労経験理解に一定の影響を及ぼすとともに、イタリアでともに家事労働職として就労する妻との家庭内ジェンダー関係を再生産するように作用してきたことを示唆している。この章では、家事労働のトランスナショナル化のなかで、移住労働者を送り出す社会のコミュニティ、家庭内のジェンダー関係が再編、ないしは再生産される様相が描かれている。

次の中岡志保論文「障害者から労働者へ——就労支援にみる寄り添い方」では、中岡自身が関わる障害者就業・生活支援センターの活動から、「ノーマライゼーション」という福祉をめぐる思想がグローバル化の中で、日本の制度にどのように作用し、それを受けて各施設がどのように地域と関わっているのかを明らかにする。1970年代、権利・人権に関する意識が世界的に高まっていく中で、ノーマルでない施設に障害者を隔離することへの批判からノーマライゼーションの思想は広がったが、日本では施設の大規模化が進んでいた。

国際人権条約の批准に伴い日本の施策にもノーマライゼーションが浸透していったが、そこで重視されたのが「選択の自由」等の主体性の確立であった。中岡はアマルティア・センの「潜在能力」概念を用いながら、就業支援の中で「選択すること」をより掘り下げ、「やりたい」と「やれること」を支援者が押し量りつつも、相手に寄り添うことを重視する。とりわけ2000年代以降、諸制度が整備され、「本人の選択を重視する」ように質的に変化した就業支援において、支援者が「ノーマライゼーションという言葉に励まされる」ようにして施設からの自立支援や就労、企業連携が進められてきた。しかしながら支援が就労に特化するにつれて、障害者への教育でも職業者教育に偏る傾向にあるという。それは「社会に出て働け」と急がされているようにも見える。就労支援の現場で「ノーマル」について問い、試行錯誤を重ねる支援者と就労を目指す障害者に対して、施設の外で広がる「優生思想」と障害者差別はあまりにもギャップがあるのではないか。

本セクション最後の岡田菜穂子論文「『障害』への対応——日本の高等教育機関における障害学生支援の現場より」では、高等教育機関におけるグローバル・スタンダードな障害者支援と、個々の学生への多様な支援を通じたローカルな対応との往還について論じる。アーヴィング・ゴフマンは刑務所や精神病院などを例に、多数の類似の境遇にある人々が相当期間社会から隔離され、閉鎖的で形式的に管理された日常生活を送る場所を「アサイラム(全制的施設)」と呼び、そこでのシステムや管理について論じたが、現代社会においてアサイラム的空間は特定の施設に留まらず拡大している。岡田は、その一つとして高等教育機関での障害者支援に焦点を当てる。日本の高等教育では、中岡論文と同様に障害者の権利条約批准と権利拡大にあわせて対応が求められるようになってきた。現場では対応すべき障害種が多様化し、確たる「障害」の診断書を持たない「グレーゾーン」の学生も存在する。しかし支援ニーズが共通する可能性があるため、多様な学生が参加できるような授業形式、すなわちユニバーサルデザインされた授業を用意し、特別な支援対応を小さくすることが有効になる。これまで少数派とされてきた障害学生に行ってきたマイノリティ支援だけでなく、多様性にどう対峙するのかが現在議論されているのだ。他方、障害学生が別室

での授業等を受ける方が効果的なこともあるが、現場では包摂を目指しながら排除をしていないかと葛藤を抱えつつ支援が行われている。岡田は支援における包摂と排除の入り組んだ状況を詳細に記述しながら、支援が必要な学生たちにとって「ある程度」他の受講生と同様に授業が受けられるということが、実は重要なことなのではないかと指摘する。

Covid-19の流行から個々に隔離された場所から授業を受けている学生たちが数多く存在する。オンライン授業とは何よりもまず自己と他者の健康をケアし、かつ距離を超えてつながり、様々なツールを利用することで新しい学びの可能性を示す一方で、学びの空間をいかに共有すべきなのかが議論される現在、岡田の考察は手掛かりになるのではないだろうか。

第IV部「ツーリズムとつながり」では、観光現象に焦点を当てる。比較的人類学における歴史が浅いものの、1977年にV.L.スミス編著『ホスト・アンド・ゲスト』の第一版が刊行され、観光人類学の議論が蓄積されてきた。人やイメージのモビリティが飛躍的に向上し、また単なる観光地だけでなく日常そのものが観光対象ともなる現在においては、あらゆる人々が、ツーリスト(=ゲスト)あるいはホストになりうる。特定の共同体に所属しつつ時折別の共同体を訪れる「観光客」によって引き起こされる「偶然」や「誤配」[東2014]によって、フィールドにおいてどのような「つながり」やイメージが生じ、そしてそれらがいかに交渉されているのかを、「啓蒙」「ミドルマン」「地域文化」というキーワードを用いて論じる。

最初の論文は川崎和也の「オーストラリアにおける『啓蒙』としてのアボリジニ観光——ティウイ・ツアーの事例から」である。日本人観光客も数多く訪れるオーストラリアは、1970年代から観光振興に力を入れている。80年代以降は先住民アボリジニ観光が注目され始め、2000年代にオーストラリア全土に広がった。国から見るとアボリジニ観光は、アボリジニを社会保障に依存させず自ら稼がせるための「装置」である。もちろんアボリジニにとって収入は重要だが、それ以上に観光は文化や土地を奪われてきた彼らにとって自分たちの歴史や文化を観光客に「教える」いわば「啓蒙」としての側面がある。オーストラリア大

陸の北端に存在し、白人による暴力的な入植経験を持たないが故に「伝統的な文化」を残すティウイでは、他のアボリジニ居住地と比較して早い時期から観光産業に参入し、外部とのつながりを模索してきた。そこでの観光は住民にとって経済的意義を持つが、僻地まで「本物」のアボリジニ観光をしにきた客に対して、「ティウイの文化」を示す重要性もある。ここでは他地域のアボリジニとの差異化によって、「アボリジニらしさ」というイメージの消費に終わらないアボリジニ観光の意義を示している。と同時に、それはホスト側の意義に過ぎず、また一時的に立ち寄るだけのゲストに対して恣意的に選ばれた「文化」を示しているに過ぎないという文化の真正性に関する問題も抱えている。

次の中村八重論文「対馬の観光における他者イメージの形成——ミドルマンを中心として」では、長崎県対馬市という日韓の「国境の島」において観光業に関わりを持ち、韓国と日本の間で両者をつなぐ役割を果たす多様なアクターである「ミドルマン」に注目し、観光における他者イメージの形成に果たす彼らの役割を論じる。対馬におけるミドルマンとして、対馬在住の韓国人、日本人で韓国人業者と連携する観光関係者、島外から移住して観光関連産業に携わる日本人移住者などが挙げられる。対馬は中世から朝鮮半島の窓口として機能してきたが、韓国人による本格的な観光は1999年に始まる。対馬では韓国人のお土産として対馬のものではなく日本商品が好まれるように、ホスト・ゲスト間の「売りたいもの」と「欲しいもの」に食い違いが見られる。また、団体観光客が自文化の生活様式のままで観光することで、現地社会との間に軋轢をもたらされ、対馬での「韓国人観光客」に対するネガティブなステレオタイプが生み出された。こうした状況は、次の越智論文とも共通する観光の場における「文化摩擦」である。このようなホスト・ゲスト間を仲介するのがミドルマンである。韓国人ミドルマンは交流事業、雇用関係、日常的な対面関係によって対馬の人々との間につながりを持つ。彼ら是对馬の「商売下手」を地域史や排他性からよく理解していて、観光に理解のある人材が島に残らないことを嘆く。そこに新たに加わるミドルマンが日本人の移住者である。第三者の目から見て対馬の良さを理解してそれを活かしながら観光に関わる事業を展開する彼らが、島の人と友好的な関係を築くことで、彼らの事業は進展する。マス・ツーリズムにおいてはゲ

ストの個人性が剥奪されマスとして扱われることが多いが、対馬では韓国人観光客の増加によって、観光客がより個性のある人として迎えられるようになったのは、こうしたミドルマンの存在によるところが大きい。しかしながら、2019年の日韓関係の冷え込みから観光客が激減したことから、二国間観光の脆弱性が露呈した。近い他者に対していかに多様性と多元性を提示するかが復活の鍵になるだろう、と中村は指摘する。

最後は越智郁乃論文「インバウンドによる沖縄観光の変化と『地域文化』——台湾人観光客の観光動向と米軍用跡地開発との連関を例に」である。沖縄が日本に組み込まれてから約120年の間、「日本による日本人のための観光」が行われてきた。沖縄戦を資源とした「慰霊観光」を誕生させ、南国リゾートや歴史文化で異国感を満喫しつつ、マス・ツーリズムからエコ・ツーリズムまであらゆる形態の観光を発達させたのは、日本人であった。故に日本側の観光イメージを強く内面化した沖縄で、2000年頃から増加した訪日外国人観光客（インバウンド）による日本製品のショッピング観光は、「沖縄の独自性」の否定を意味した。しかしそこに「沖縄らしさ」はないのだろうか。例えば、近年増加したショッピングモールの多くは、返還された大規模米軍用跡地の開発によって出来上がったものであるが、そこには戦後の米軍統治期に存在した米人向けショッピングモールや、フェンスで囲われた土地の中に存在した「アメリカの街」の記憶が反映されている。こうしたショッピングモールもまた「沖縄の文化」の一部であり、今日多くの外国人観光客が訪れる場所となっている。日本からのまなざしによって、日本人のみを対象に多様な観光を展開してきた沖縄において、今度は多様な国の人々に対して、「日本」「アメリカ」を含む多様な沖縄を示す必要があることを指摘する本論は、玉城論文における「コスモポリタニズム」に相通じるのではないか。

おわりに

2020年2月、日本国内外でそれぞれの研究・教育を行う私たちは、本書の基となる研究会を開催予定であった。しかし、2020年に入り急速に広がったCovid-19の拡大によって中止せざるを得なくなった。それは、グローバリゼーション

について改めて問い直す機会につながった。

各論考を通じて明らかになるのは、古くから議論されてきた人類学的テーマにせよ、「グローバリゼーション」を経て新たに俎上に上がったテーマにせよ、各フィールドにおいて多様性をいかに内包しつつ、いかに外部に向かって多方面に関係性をつなげていくのかということが問われ続けているということだ。そして、「遠くの異文化」を選択しがちであった人類学者のフィールドは、そこから移動してさらに「遠く」の場所につながり、かつ「身近な異文化」に増殖し続けている。

Covid-19をめぐるグローバルな状況においては、人々の連帯の一方で他者への非難、監視が強化されている。さらに、グローバルな交易の拡大と同時に高まる自国第一主義の強化も指摘されて久しい。このような、つながりとへだたり、接続と断絶、連帯と疎外といった、今日のグローバリゼーションが持つ二面性、両義的な動態の解明は、まさに「新たな日常」における生の指針を得る上で、喫緊の課題であるといえる。このような問いを、抽象的かつ一般的な理論としてではなく、世界各地の地域社会の固有な生の文脈において考える各論考を、文化人類学だけに限らず、隣接諸分野、そして大学で学ぼうとする学生諸氏と共有し、共に議論し続けるための一歩として本書があると考えている。この本が新しい世界とどのように関わり合っていくのかを示すものになることを編者一同願う次第である。

参考文献

- 東浩紀 2017『ゲンロン0 観光客の哲学』ゲンロン
クリフォード, J 2002 (1997)『ルーツ 20世紀後期の旅と翻訳』毛利嘉孝・有元健・柴山麻妃・島村奈生子・福住廉・遠藤水城訳、月曜社
高谷紀夫・沼崎一郎 2012「序章」高谷紀夫・沼崎一郎編『つながりの文化人類学』東北大学出版会
田川泉 2005『公的記憶をめぐる博物館の政治性 アメリカ・ハートランドの民族誌』明石書店
内閣府 2004「第1節 日本経済とグローバル化」『平成16年度年次経済財政報告』
ハーヴェイ, D 1999『ポストモダニティの条件』青木書店